

匠林

SAKABAYASHI

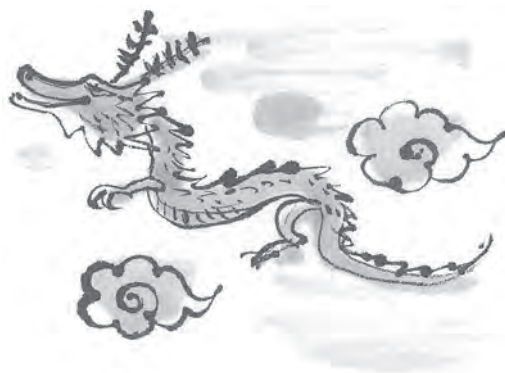
隨筆特集



酒林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第83号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



作家魂・文学の鬼	絵と文 白い一輪菊	新薬アラカルト	ミシガンのガールズトーク	星の恵み	ほろ酔い詩歌紀行	—— 鉄幹の酒	生口島と三次	イグ・ノーベル賞	プランター農夫
志村有弘	中西美子	杉本忠夫	宮地智子	内野潤子	日高昭二	安森敏隆	高橋和島	池井優	高橋和島
19	18	16	14	12	10	8	6	4	6



小説風・江戸神仏歳時記(24)——金竜山浅草寺

表紙・グラビア……オリーフ

	過去が現在に生き返る	志村栄守	…21
絵と文	そこに住む子供	佐川毅彦	…23
	大せいろ一筋	桐原良光	…24
	栗きんとんと蒲鉾のあいだ	片岡義男	…26
	壬辰元旦	山西靖彦	…28
絵と文	ハイドン廟にまつわる話	さかもとふさ	…30
	義経伝説追跡行	永岡慶之助	…31
	「顔本」事始め	山本千明	…33
	野良仕事と野生の動物	宮本富夫	…35
	郡	順史	…37

イグ・ノーベル賞



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

わさびの効いた鰯を口に入れ、鼻についんときた経験を持たないひとはいまい。そこに着眼し、わさびの強烈なおいを嗅がせることで眠っているひとを起こすのに適切な空気中のわさびの濃度を発見し、これを利用し火災警報装置を開発した日本人グループに二〇一一年度のイグ・ノーベル化学賞が授与されることになった。

イグ・ノーベル賞とはなにか。ノーベル賞をもじり「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」に対して与えられる。一九九一年にサイエンス・ユーモア雑誌の編集者によって創設さ

れ、毎年風変わりな研究をおこなった人、社会的事件などを起こした十の個人やグループに対し、時には賞賛と笑い、時には皮肉をこめて授与される。

日本人として最初に医学賞を受賞したのは、「足の匂いの原因となる化学物質の特定」の研究をおこなった資生堂の六人のグループであった。足が臭くなる、靴、靴下などがある時は鼻が曲がりそうな強烈な悪臭を放つことさえある。その原因を突き止めたのだ。第二回の一九九二年のことであった。『たまごっち』により、数百万人分の労働時間を仮想ペットの飼育に費やさ

せたことにより経済学賞を受賞されたのは、おもちゃメーカーの二人。犬語翻訳機「パウリンガル」の開発によって、ヒトとイヌに平和と調和をもたらした業績に対して平和賞を得たのは獣医師、音響研究所、玩具メーカーのプロジェクトチームであった。名庭園兼六園に置かれている日本武尊にハトが寄りつかないことをヒントに、カラス除けの合金を開発した金沢大学の教授には化学賞が与えられた。

授賞式は毎年十月、ハーヴァード大学の構内で最古、最大、もつとも威厳のある建物であるサンダース・シアターでおこなわれる。授賞式の当日、会場のホールは一二〇〇人の聴衆で満員になる。招待された受賞者は、旅費は自己負担だが、自腹を切つてやつてくる。この賞の授賞式にふさわしく、聴衆はステージに向かって一晩中紙飛行機を飛ばし、ステージ上の受賞者は飛んできた紙飛行機をひっきりなしに飛ばし返す。授賞式がクライマックスに達するのは十人の受賞者が一人ひと

り名前を呼びあげられる瞬間である。受賞者はステージ中央のカーテンの後ろから登場し、そこで本物のノーベル賞受賞者と握手を交わし、賞品を授与される。賞品は安物の材料で作った手作りの品、賞品について実際のノーベル賞受賞者のサイン入りの認定書が渡される。

これまでの授賞式で一番盛り上がったのは、カラオケを発明した井上大佑が受賞した時であった。「受賞理由は、カラオケを発明することで、人々が互いに寛容になれる手段を提供したことです」司会者が井上を紹介すると会場は拍手と歓声で大騒ぎとなった。「聴衆が静まるのを待って井上は受賞の挨拶をした。といっても英語に堪能でもなんでもない。井上はかつて大阪のバンドマンだった。素人の下手な歌に合わせて上手に歌わせる特殊な才能を持っていた。井上を鼻屑にしていたある中小企業の社長がお得意のお客さんを招待して温泉旅行をおこなうことになり、井上に声が掛った。「大ちゃん、

わしあんたの伴奏でなきや歌えんのや。一緒にきてや。」仕事の予定が入っていた井上はその社長の歌のくせ、ここで音程を外す、ここであって音を伸ばすなど熟知していたので、社長の持ち歌三曲のテープを作って旅行に持って行ってもらった。翌日現れた社長は上機嫌だった。「大ちゃん、お陰で大受けや」。ここで井上はヒントを得た。これはビジネスになるぞ。仲間のバンドマンとなつメロ、軍歌など伴奏用テープを何百曲か作って「8トラックテープ」(通称8トラ)に入れた。百円入れると五分間作動するようにして小さなスナックに置いてもらった。これが「カラオケ」の元祖である。二、三カ月たつと火がついた。

「イグ・ノーベル平和賞をいただきたいこんなうれしいことはありません。私は、かねてひとに歌う喜びを知ってもらいたいと思っていたので、カラオケを考えました。こんなに普及するとは夢にも思いませんでした。さあ一緒に歌いましょう」。カタカナ英

語で用意したスピーチをおこなった井上の音頭で会場は I want to teach the world to sing in perfect harmony の大合唱となった。

勿論、イグ・ノーベル賞には受賞を不名誉と考える人たちもいる。特に科学の分野で「大衆がまじめな科学研究を笑い物にする恐れがある」とイギリス政府の主任科学アドバイザーは、イグ・ノーベル賞の運営員会に対し今後イギリス人研究者には賞を贈らないよう要請したことすらあった。これに対し、イギリスでは反発、反論が起こったが、二〇一〇年画期的なことが起こった。二〇〇〇年、生きたカエルの磁気浮上の研究でペリー博士とともにイグ・ノーベル物理学賞に輝いたアン・ドレ・ガイムは二〇一〇年、なんと本物のノーベル物理学賞を受賞するはじめての人物となったのだ。

イグ・ノーベル賞、ぎすぎすした世の中にはこんな賞がもつとあってよいのではなからうか。

プランター農夫

わが町のゴミ収集日は火、金の週二回。指定された場所までゴミ袋を運ぶのはわたしの役目になっている。

このとき歩く約百メートルの途中、必ず低い生け垣越しに庭を覗くことにしている知人の家がある。奥さんと二人、年金暮らしをしているAさんの家だ。

覗く目的はプランターに植えられた様々な野菜のでき具合の偵察である。

Aさんがプランター野菜づくりの名人であることを知ったのは、わたしがゴミ袋出し担当になってからだから、五年前ということになる。春は小松菜



高橋和島

(作家・郷土史家)

や絹さやエンドウ、夏はナス、キュウリなどの見られるAさんの庭を横目にした当初のわたしは、野菜の出来具合の見事さに感心はしたものの、それだけで終わった。

これが「おれも一つやってみるか」に変わったのは、Aさんの次の言葉を聞いてからだ。

「水だけでも野菜を作れる時代ですよ。土の入ったプランターでダメなはずはないじゃないですか。やってごらんなさい。簡単なもんですから」
拙宅もAさん宅も四十年近く前にできた造成団地内の家だから、敷地はと

もに七十坪。陽当たりも似たようなものである。

ずっと前から家庭菜園に憧れながら、そのための土地を買うだけの甲斐性がなく、憧れを憧れだけに終わらせてきたわたしは、Aさんに背中を押された恰好でプランター野菜に取り組むことになった。

スタートは春先の絹さやエンドウとスナックエンドウ、そして小松菜だった。

エンドウはあきれれるほど速い弦の伸び具合や可憐な花を楽しめたことも含め、成功と言わぬまでも、まずまずの

できたつた。

まったく駄目だったのは小松菜のほうで、青虫とヒヨドリにいいように食い散らされ、収穫ゼロに終わった。

エンドウで多少の自信を得たわたしは、沢山の夏野菜に挑戦した。ナス五株、キュウリ六株、トマト二株、ピーマン三株、インゲン四株、オクラ二株……。手当たり次第である。狭い庭は野菜プランターで埋めつくされることになった。

どの野菜も病気や虫との戦いになったが、トマト以外は収穫の喜びを味わうことができた。

夏の盛り。午前四時過ぎには庭に出る。まず、朝顔代わりに軒下のネットに這い上らせたキュウリとその手前のナスの様子を見に行く。そろそろ採ってもいいかな、と前日見当をつけておいた奴がみな期待どおりの大きさになっている。

わたしは黙って彼らをもぎ取るようなことはしない。「おつ、すごいな。見事なものだ」「おまえ、スーパ

売場に並べてもらうか」などと声を掛けてやる。

野菜にぶつぶつ話し掛けるわけだから、ひとが見れば、いよいよボケてしまったと映るに違いないが、どう思われようとかまわない。頑張った野菜には声を掛けてやりたいのである。

自分が作った野菜の味は格別で、ナス、キュウリの浅漬けは夏の食卓の大きな愉しみとなった。ピーマンとオクラに至っては、食わず嫌い、これまで箸をつけずにきたのだが、自家製となれば「一口食べてみるか」ということになる。食べてみれば悪くない。かくして嫌いだった野菜に手が出るようになり、家人を喜ばせることになった。

こうした自分のご都合主義に気付いたわたしは好きになれずにいるニンジン、ニラ、ニンニクも今後作るつもりだ。夏野菜が終わったあとは白菜やキャベツをやりたかったのだが、Aさんから「かなり難しい野菜だと思つたほうがいいよ」と聞かされたので、先送りすることにし、代わりに勧められたミ

ニ大根、葉大根、正月菜の種を播いた。

彼に言わせると、春の青菜は虫や野鳥にやられがちで難しいが(わたしの春先の小松菜は全滅した)、秋の青菜はさほど苦勞を要しないのだとか。

万全を期するには虫よけネットを張ればいいと教えられたので、言われたとおりネットを被せてみると、ミニ大根以下の三種はきわめて順調に育ってくれた。

新米のプランター農夫はいま考えている。今後はジャガイモ、枝豆、タマネギ、ニンニクも挑戦対象に加え、できるならAさんが難しいと言つた白菜とキャベツもやってみよう、と。むろん、失敗したトマトも簡単に諦めるわけにはいかない。

口の悪い友人が「土いじりが好きになつたのは土の中(墓)へ入る時期が近づいているからさ」と笑つた。どう言われようと、自分、プランター野菜づくりは続けるつもりだ。

生口島と三次



安森敏隆

(同志社女子大学教授・歌人)

いつの頃からか、杉野徹先生は海賊で私は山賊になっていた。これは、二人の中での親しい呼び名であり、また親しい相手に紹介する時には、杉野先生が「海賊」になり、私が「山賊」になっていた。それは杉野先生が、かの有名な瀬戸内の「生口島」の生まれで少年時代を過ごされ、私が備後の霧深い「三次」の生まれで少年時代を山国で送り、ガキ大将であったことを誰よりもよく知っていたからである。

山口の宇部にある短期大学で初めて先生にお会いした。まことに素朴でやさしい笑顔が印象的であった。先生は新任の私の前に旧知のごとくす

うーと歩み寄られ、宇部での過ごし方や宇部短大のことや教会（緑橋教会）での過ごし方などを親切に教えてくださり、家族同士の付き合いをしてくださいました。後から、私も所属した緑橋教会の陣内厚生牧師から聞いた話によると、ある日、先生はふらりと教会の玄関に下駄履き姿で訪れ、「何かするとはありませんか」と気楽におっしゃり、そのまま教会員のように毎週、家族で礼拝に訪れ、バザーや色々の御奉仕をなさったということである。私が教会に行った頃、先生には、「仁君」と「玄君」という一歳と二歳くらいに

を走り回って人気者でもあった。先生はいつも他の子供たちとともに、二人のお子様を優しく見守り、またよくお世話もされていた。それからまもなく先生は同志社大学にお帰りになり、私は下関にある梅光女学院大学に赴任した。このわずか一年間の宇部での出会いが、かくも私たちの長いお付き合いの原点になろうとはその時には思いもよらないことであった。

同志社大学に帰られた先生とはその後、私が京都での学会や短歌の会など、また妻の実家が京都でもあり、京都に滞在することも多く、そんな折に家族で先生宅にお邪魔させていただいたり

したものである。一方、下関の大学へ赴任した私は、日本海や関門海峡を見渡せる大学の洒落た「六角堂」というレストランに週二回、東京から来られる英文学部の大学院の特任教授で評論家の磯田光一先生と談笑しながらコーヒを飲み、お話が聞けることを楽しみにしていたものである。当時、問題を投げかけていた梅原猛の『水底の歌』や遠藤周作の『スキヤンダル』が話題になったり、作家の司馬遼太郎や井上ひさし（先日亡くなられたばかりである）さんが、大量に本を山積みして買い集めているのに、昨日、神田の古本屋で会って来たよ、という具合に、いつもホットな文学やジャーナリズムの最前線の話がリアル・タイムで展開され、色々の話が聞けてとても楽しかった。そうした中で、「日本英文学会」の話なども出て、私の畏友の中央大学で英語の先生をしていた川口絃明君の話や同志社女子大学に設置されているミルトン学会の話もよく出た。そうした折々、同志社大学に帰られた杉野先

生が、九州や山口の大学で学会があるときには、私の下関の家にもよく立ち寄ってくださった。

その頃であつただろうか、私の大学時代からの畏友で、塚本邦雄や寺山修司などと親しくシンポジウムやコロキウムをしてきた歌の仲間で、ロマン派の研究やT・Sエリオットの研究家である、先に記した川口絃明君が、中央大学で「日本英文学会」の事務局長をしていたころ、学会で杉野徹先生とお会いになり意気投合され、うれしい三人の友情が生まれたことである。

この川口絃明君は酒が強く、大学時代につくった同人誌「幻想派」（京都大学教授で歌人の永田和宏君ら二十名ばかりの学生がいた）の時代、川口絃明君を迎えて飲み明かしたものである（妻が翌朝、ビール瓶を整理していたら三十三本の空き瓶があつたという）。十六・七本ばかり一人で飲んだことになる。

もともと同人誌の「幻想派」は、西田幾多郎や田辺元に師事した京都大学

の哲学者たちが形成していた「京都学派」を志向し、短歌版の「京都学派」という名称も候補のひとつに上がつっていたのだが、果てしなき議論の末に、「幻想派」で行こうということになり「0号」からはじめて「10号」（昭和四十八年十二月）で終刊することを約して刊行されたのである。そして、この同人誌の身近には幻想の騎手・塚本邦雄がおり、毎月の合評会や会合に出席してアドバイスをしてきていた。

「幻想派」の創刊には、川口絃明（東大）、北尾勲・田中富夫・清水玲一・安森敏隆（立命大）、永田和宏・稲実絃之・桐林康広（京大）、河野裕子・光本恵子・遠山利子・三船厚子（京女大）等が参画してきたのである。この学生中心の同人誌「幻想派」は、それ以前にあつた学生短歌会である「京大短歌」「立命短歌」「京女短歌」「関学短歌」の学生達の俊英を集めて結成されたもので、「0号」（昭和四十二年十一月）から始められたのである。

ほろ酔い詩歌紀行

鉄幹の酒



などには、かえって本当の気概や真実があるものだという見立てであるが、鉄幹自身にとっては歌びともそうした類の存在とする思いが隠されていよう。

わが歌ごゑの高ければ

酒に狂ふと人は云へ

われに過ぎたる希望をば

君ならではた誰か知る

日高昭二

(神奈川大学教授)

与謝野鉄幹といえは、かつてひとびとによつて広く歌われた「人を恋ふる歌」を思い出す。

はみずからの意気を熱く解き放つという習慣があつたが、この歌などもそのひとつであるう。「妻をめとらば」につづく一連には、また次のような言葉も含まれている。

「人を恋ふる歌」は、男同士の友情を基本にした詩であるから、この「君」はもちろん心を許した友であろう。自分の歌声を聞いて人は酒に狂つているとしか思わないだろうが、しかし自分の高い理想は親友である「君」なら分かってくれるだろうというのである。

妻をめとらば才たけて

顔うるはしくなさけある

友をえらば書を讀んで

六分の俠気四分の熱

くめやうま酒うたひめに
をとめの知らぬ意気地あり
簿記の筆とるわかものに

まことのをのこ君を見る

明治三十二年の作で、鉄幹の名をもつともよく知らしめた歌である。戦時中までの青年には、高歌放吟をして

ひとがあまり知らぬ歌妓や若い商人

「われ男の子意気の子名の子つるぎの子」と詠んだ詩歌集『紫』のなかの一首である。鉄幹にとつて、「酒」は

つねに「おのこ」の熱情とともにあった。

そうした鉄幹の世界は、鳳晶子との恋に発展して、さらに浪漫的色彩が色濃くなっていく。

木の実の酒紫に

うくる手わななくか

さるは盃に口ふれて

酔ふ子に智慧問ふな

雑誌『明星』の明治三十四年三月号に発表された「春思」にみえる詩である。山の湯で、春のひとつときを晶子とともに過ごした折の詩だという。

木の実の酒は、葡萄酒のことで、それを盃で受けた彼女の手がふるえているが、酒に酔った人にさかしらな理性を問うことはもとより無駄なことだと歌われている。

われおもふ酒の旨きは

哲人もうべなはむ

許せもゆる手肘まきて

ただ没我の二人

人が旨酒に酔うのは、哲人も許してくれるだろう。それと同じく、人が恋に酔うのも許されることだと歌う。「もゆる手」といい、「肘まきて」といい、「没我」になつた恋人同士の熱い抱擁がなまなましく示されている。「没我」には「われか」とルビがふつてあるが、酒に酔つて自分か他人か見分けがつかないという意味で、それが恋にまで転化されたもので、明星派の人々に好んで使われた言葉であるという。

つよくつよく

泣くに王者も憚らず

襟は冷たきも

色紫なり

病む子を責むな

瘦せて酒嘲る

これもまた、晶子との恋を歌つた詩「長醉」における情景である。「長醉」とは、いつまでも長く酔うという意味だが、この場合の酔うとは、もちろん

恋に酔うということでもある。引用したのは、その「長醉」の冒頭で恋に泣く晶子に心ゆくまで泣けと歌つたあとにつづく一連である。

「泣くに王者も憚らず」という評言にみえる「王者」という言葉は、鉄幹がよく使う言葉で、芸術に生きる者の誇りや陶醉を「王者」に見立てたものである。その延長上で記された「色紫」も、もちろん「王者」の色である紫を指している。その色が着物の襟に見える晶子にも、王者と同じ誇りや楽しみが秘められているはずだという囁きが聞こえてくるようだ。

明治六年、京都市外岡崎村の西本願寺派の願成寺に生まれた鉄幹は、二十三歳のときから三度にわたつて朝鮮を行き来している。このアジアの「志士」とつての酒は、燃ゆる火のごとき祖国愛を醸すものであり、やがて歌人としての誇り豊かな才能を開花させる同伴者であり、さらには恋に生きる者の甘美、恍惚をいつまでも冷めやらぬものとする比喩でもあった。

星の恵み



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

今年も一人で七夕祭りをした。

家の者は「綺麗ね」などといって眺めるだけだが、私は心待ちして真面目にお祭りする。

昔、国文科の授業で、先生が「文化の伝承というのには、昔からの四季折々の仕来たりをきちんと守る、それぞれでいいのです」と言われた。新年の挨拶からはじまり、二月の節分、三月の節句など、それ以来怠りなく続けているが、近年になって自然に周囲から影が薄くなるものもある。

お節句などはデパートが先に立つ

て、雛人形を売り出すので当然残ってはいませんが、節分の豆撒きや、五月の菖蒲湯などはわざわざしない家も多いらしい。

それより好きなテレビを見ていたり、直接生活に関係ないものは、きりすてられてゆく昨今である。七月の七夕は幼稚園や商店街の人よせのイベントとしてはあるが、子供のいない個人の家では、まずわざわざ竹を求めてする人は少なくなってしまった。

私は七夕近くになると心床しい歌の友人が近くに住んでいて、手頃な竹を

切って自宅の玄関に運んで下さる。そして七夕飾りも折紙や障子紙で作って届けて下さる。

さて私自身も折紙で吊すものを作り、いよいよお願いをいろいろと書くことになる。

去年の七月のこと、私はたくさんの願いごとを書いてその短冊を木綿糸で笹の枝に結びつけたのだった。

先ず大学入試を控えた孫の一人の合格をお願いした。彼は青梅に近い羽村に住む次女の長男で、サッカー一筋の少年だった。それもゴールキーパーを務める選手で、指の骨を折り手術もしたことがある熱心さであった。勿論勉強の方は二の次で、娘は大学に入れたいのではないかといつも心配していた。どこでもいい入った処に入れればいいと半ば諦めていたのだった。入試の時が迫ってもいつまでもサッカーを止めない、いよいよ夏休み近くなり、娘夫婦はいやがる彼を説得して、受験用の予備校に入れることにした。

それからの彼は、又髪に毛が逆立

つほど夢中に勉強したらしい。

今年の三月、七ツの大学を受けた彼が、奇蹟の如く次々合格してしまい、電話の前の私が言葉が出ない程驚きかつ喜んだのだった。

遂に七校全部合格して、その中の一つを選び彼は大学生になれたのである。

次の願いはもの書きの長女の本がなかなか出ないので、その原稿の束を誰かが拾って本にして下さるようにとお星様にお願ひしたのであった。その年のうちにそれも本になって本業の詩の本と二冊、世に出ることになったのである。

何かあれよあれよというような具合であった。しかもエッセイ集の本は次々に新聞がとり上げてくれて、眩しい毎日をも恵んでくれたのであった。詩の本も賞の知らせがあつて、この頃は何か空恐ろしい思いがしたものだ。

その上、私は心のうちでのみ願ひつていた結婚して同居している孫に、赤ちゃんまで授かることになったのだった。

当り年である。何か誰かに守られていららしいと確信した。亡くなった夫や、両親、兄弟、尚諸々の死者、そして天の恵み星の恵みをはっきりと感じたのである。

欲しきものみな手に入るは空恐ろし段くだふみ外さぬ様に下りきぬ

あまり望みがかなつて、その反動が恐ろしかったのである。そういう時に階段からころげ落ちて骨など折り、歩けなくなつたりするかもしれないと、まず高齢の自分の受難を考えるのは当然である。

それ丈ではない、我欲の強い自分を自制して少しでも人の為になかしなければ、とつよく思つたのである。

人はあまりよいことが続くと、うしろめたさと、恐ろしさが湧くことも分かつた。

そしてその後まだ嬉しいことが続いたのであつた。女の孫が結婚するといふ。

この孫は、関西に住む長男の長女で名付け親は私の父であつた。悦子とい

う子で明るくよくしゃべる子だった。今年のお正月も一緒に初詣でにいき、彼女はおみくじをひいたら大吉だった。「よかつたね」と私が言つたら「おばあちゃんに上げる」と惜しげもなく私に渡すような優しい子なのだ。同じ職場の人に望まれて今年十月式を挙げた。

もう一人の女の孫は大学の卒業を前に、就活せずにどうしても大学院にゆきたいといふ。

それは母親である次女の出身校であつた。「多分むりよ」と娘は言う。本人が望むのだからとみんなで後押しした。丁度悦子の結婚式が神戸で挙げられる日が入試の日だった。

神戸まで行く自信がなかつた私は留守番をして、入試の孫を預かつた。合格の知らせが来た日は姪を自分の娘のように愛している長女が喜んだ。最後の恵みは曾孫凜の誕生である。「この世にてよくぞ会ひ得し曾孫ひいこのしめりし足を両手に包む」の一首に尽きる思いだつた。

ミシガンのガールズトーク



宮地 智子

(詩人)

二〇一一年三月半ばから約一か月間、私が娘一家の住むアメリカ合衆国ミシガン州、イーストランシング市に滞在していたのは、長い冬が終わり、季節が春へと移り変わる時期であった。

小鳥の声の日を追うごとに、その種類を増し、池の水が溶け始めたものの、真冬のような寒さが戻り、雪が降ったり、冷たい雨が降る日もあった。あるいは、青い空に白い雲がむくむくと湧き上がって、夏のような陽差しのかな

で、首の長いカナダ雁の番が日向ぼっこをしに芝生に現われる日もあった。

二人の孫娘を保育園まで送り迎えしてくれるのは、ミシガン州立大学で心理学を専攻しているアルバイト学生のダルラさんである。「グッドモーニング。」と言ってガレッジから入って来ると、玄関に置いてある二つのチャイルドシートを彼女の車の後部座席に取り付ける。孫達は大抵の場合、出かける間際になって自分のおもちゃかぬい

ぐるみをも一つ、地下のブレイルームに取りに行ったりして、ダルラさんを持たせるので、私は「お待たせしてごめんなさいね。」という英語が上手になった。彼女は「ハイ・ガールズ。」と掛け声をかけて孫達をチャイルドシートに乗せ、しっかりとシートベルトを締める。バイバイと手を振ってガレッジの自動ドアが開まるのを見届けた後は、一人でゆつくりとコーヒーを飲む楽しみが私を待っている。テレビは操作の仕方がわからないからつけない。

台所は実に便利にできていて、流し台にはスイッチを押すと野菜屑などを碎いて流せる装置がついている。大きな自動食器洗い器には家族五人分の食器や鍋やフライパンを一緒に詰め込んで、ボタンひとつで一週にまとめて洗うことができる。しかも乾燥までしてくれるので、主婦にとつて有難い器械である。

娘の友人で、日本人のはるかさんは、三才の双子の男の子の母であり、アメリカ人の夫を支える専業主婦である